

●何を・・・・・・・・古文書を（各地域独自の 過去の情報）

◆温故知新：

優れた経営コンサルタント（組織の復興を得意とする）は、ほとんど例外無く

新しく「会社組織」の復興を図るとき、先ずはその「会社組織」の「過去の記録」の調査を行いつつ復興の未来図を設計する。同じく

新しく「地方」の復興を図るとき、先ずはその「地方」の「過去の記録」の調査を行いつつ復興の未来図を設計する。

「温故知新」から再起を開始する。

◆古文書は：（各地域の 経験と知識の集積・・・将来への知恵の宝庫）

フランシスコザビエル（室町時代）も日本国内 布教活動中に驚いた「日本国民の識字率の高さ」を現す「証拠」となる。

古くから日本の各地域の僧侶方が地域集会のおり、お経の内容など読み書きに興味のある子供たちに手習い所（寺子屋の原型）のようなものとなり、識字率が高まる。今在る古文書は、各地域における それら「文明地域の証し」であり、各地域の「経験と知恵」の集積 “宝”。

◆各地域 独自の “情報”：

廃棄されると、二度とその情報に辿り着け無くなる。廃棄や消滅は「取り返しがつかない」行為。

古文書があった存在すら確認ができなくなる。各地域の唯一無二の “宝” である古文書が相応に大切に扱われていない場合が多い。

「文明地域」として形成されてきた「その地域独自、唯一の証拠物」となる。

◆ “世界遺産に相当（動画）”：

と日本の「古文書の価値」は海外学者方から賞賛されている。

しかし各地域に死蔵されている「古文書の価値」に値する対策（特に文化財未指定の大量な古文書）は皆無に等しい。

◆今在る 古文書：

は「天災・人災」、さまざまな 「消滅・廃棄の危機」 を乗り越えて今 存在する。

各地域におけるさまざまな環境において、偶然に、故意に、その存在が継続している。

◆古文書の媒体変換は、低価格に：

昨今まで、古文書の中において経年劣化で開き難くなった「古文書」は補修費用・撮影費用が高価であった為多くが手を付けられなかったが、

・「簡易型の修復技術の開発」そして

・「デジカメ撮影の進歩」国会図書館大量電子化における実証、それら「合理化された技能」を伝授する準備が必要。（国産カメラで対応）

◆「高齢者・主婦・身障者」において（適性があれば）1～6 ヶ月でセミプロ級に育ち、「社会貢献に参加」できる状態となる。

古文書に関わる業務は 座りながらできる → 流れ作業でなくできる → 日本人特有な手先の器用さを活かせる仕事。

「古文書 復活技能」を一度習得出来れば 技能伝承の根幹となり、ゆくゆく海外の古典籍類の復活、外貨獲得の為の技能の再伝承に繋がる。